

自ら学び 自ら鍛える
Team 北中

令和3年度 学校報 第4号 令和3年7月2日

発行責任者：瑞浪北中学校校長

担当者：瑞浪北中学校教頭



<合言葉> クリエイティブ瑞浪北中 3rd year
—学校の特長を発信する年—

中学生からアプローチする地域貢献

校長

「コロナだから」なのか「コロナだけ」では大きな違いがあります。昨年度は、どちらかと言うと「コロナだから」という部分が強かったように感じます。前例がない状況に惑わされ、多くのことが後手後手に回り、感染が広がらないかハラハラドキドキ、やりたいことがやれないことにイライラモヤモヤ……とにかく不安な一年でした。そんな中、一筋の光が差したのは、「大杉再生支援」に取り組んだ地域貢献です。大湫町の大杉が倒壊したことで、地域貢献の形が一変したと言ってもよいでしょう。

開校一年目の令和元年度は、とにかく地域に安心してもらいたいということで、各地区からのボランティアの要請に応えたり、地域行事への積極的参加を勧めたりしてきました。延べ人数 400 人以上の北中生の参加があり、5つの地区に大きな安心を与えることができたのが大きな成果でした。

しかし、これは「受け身の地域貢献」です。地域の要請に応えたということは、言い方を換えれば、地域からの要請がなかったら地域との関りは生み出せなかったということです。要請に応える形の地域貢献もコロナでできなくなった令和二年度、地域の行事や催しのほとんどが中止となり、地域と中学校の関係が見出せなくなりました。その矢先の出来事でした、大湫町の大杉が倒壊したのは。

大杉は自らの尊い姿をもって、瑞浪北中の生徒に地域貢献の方向性を示してくれました。私が生徒会執行部に投げかけた「大杉が倒れたことで、北中校区の多くの方がショックを受けているよ」という言葉に、彼らは鋭く反応し、「大杉再生支援」が地域貢献の新しい形となりました。大杉写真展、マスコミの取材依頼、二度設けた寄付贈呈式などを通して、生徒たちは「中学生からアプローチする地域貢献」に取り組みました。

私は、今年度の「目指す学校」を「地域と結びつく学校」としました。令和二年度までの「地域に開かれた学校」からの転換です。北中生から地域にアプローチしてつながっていく学校づくりを目指しました。「大杉再生支援」を卒業生から受け継いだ今年度の生徒たちは、早速地域と結びつくよう頑張りはじめました。それが現在取り組んでいる「プロジェクト“f”」という取り組みです。（“f”はflowerのことです。）

今年度はアルミ缶回収の収益金で、地域に鉢植えの花をプレゼントしようと生徒たちは動いています。「地域のために自分たちにできることは何か」を生徒たちが考えて出した答えです。私はそのことに大きな意味があると思っています。要請があって動くのではありません。ヒントを与えられて動くのではありません。自分たちで判断し、自分たちで考えて、自分たちで動くとしているのです。これこそ、瑞浪北中が「特長」と位置付けている「主体性」です。開校三年目にして生徒たちがそのような姿に成長してくれたことは、私にとっても大きな感動となりました。



スタンバイされた鉢植え

7月2日には、準備した鉢植えの花と自分たちの思いを、生徒たちが市役所にもっていく予定です。水野市長も生徒たちの気持ちを温かく受け止めてくださり、市長自ら鉢植えを受け取ってくださるとのこと。生徒たちにとって大きな喜びと励みになることでしょう。

小さな小さな花ですが、生徒たちにとって大きな大きな意味をもつ花です。地域と積極的に関わることによって地域の人々の思いに触れ、地域を見つめ直すきっかけになることでしょう。地域に住んでいても、地域から距離をおいて見ていれば、地域のよさや魅力はいつになっても知ることはできません。地域との距離を自分から詰めなければ、それらはわからないものです。

先月の13日（日）に、瑞浪市総合文化センターで瑞浪市主張大会が開催されました。瑞浪北中の代表として参加した3年三浦祐依さんは、地域との距離を自分から詰め、地域のよさや魅力を見つけた経験を堂々と語りま

した。その主張の全文を次に掲載しますので、ぜひ読んでいただきたいと思います。

私の誇り

瑞浪北中学校 三年 M・Y

令和2年7月11日、夜の10時半過ぎでした。我が家の電灯が突然消え、辺りは暗闇に包まれました。懐中電灯のわずかな明かりを頼りに、私たちは不安な夜を過ごしました。

「何！大杉が！」

祖父のもとに、電話がかかってきました。暗闇が我が家を襲った30分後のことでした

土砂災害警戒情報が出ている中、祖父は慌てた様子で、大杉のある神明神社に向かいました。いったい何が起きたのかわからなかった私は、真っ暗な家の中で、早く明かりが点いてほしいと願いながら、祖父の帰りを待っていました。

私の住む大湫町の大杉は、樹齢約670年、高さ約40メートル、根元の周囲が約11メートルの御神木です。岐阜県と瑞浪市の天然記念物にも指定されており、市の観光名所として親しまれています。町を見守り続け、住む人々の「心の拠り所」となっています。私も、大杉に見守られて、これまで育ってきました。

その大杉が倒れたことを、私は信じるできませんでした。しかし、家に戻ってきた祖父の悲しそうで、つらそうな表情を見て、大杉が倒れたことが事実だと知りました。これまでに私が経験したことがない「とんでもないこと」が起きたのだとわかりました。

翌日から、町民による必死の作業が始まりました。夜明けとともに、祖父も神明神社へ出向き、無残に折れた枝の片づけ、切れた電線による漏電の注意喚起、そして、残った枝を切る業者の手配などに懸命に取り組みました。

大杉を元に戻すことはできません。町民たちは悲しみをこらえて、大杉をどう保存するかを考えました。町民が出した答えは、「大杉の一部保存」です。根幹の一部を境内に残すために、根の洗浄が行われました。子供たちの記憶に残すために、倒れた大杉の見学会が行われました。破損した神明神社の敷地の再整備のために、市内の様々な場所に募金箱が設置されました。さらには、ネット上で協力金を呼びかけて支援を募る「クラウドファンディング」も2カ月間行われました。

私の通う瑞浪北中学校でも、大杉の写真展が開かれ、大杉について知ることから始めました。統合で校区となった他の地区出身の仲間、たった4人しかいない生徒の出身地区大湫町のことを知ってもらいました。そして、毎年行っている生徒会主催のアルミ缶回収の収益金を、神明神社の大杉再生活動のために募金することになりました。

私はこのアルミ缶回収を通して、大きな感動を覚えました。中学校の仲間が大杉再生活動に協力してくれたことをとてもうれしく感じました。それと同時に、大湫町に住んでいる私自身も「大杉のために何かしなければ」と考えるようになりました。

私の祖父を含め、大湫町の人々にとって、大杉の倒壊の現実を受け入れることは簡単ではなかったはずですが。しかし、倒壊した翌日から、すぐに自分たちにできることを一生懸命考えて行動していました。そんな姿を見て、私はとても勇気づけられました。そして、そんな方たちが私の身近にいたことを、誇らしく思いました。

祖父たちは一体どうして、あんなに必死に大杉を守ろうと努力しているのかを、私なりに考えました。それはきっと670年も長い間、大湫町を見守り続けてきてくれた大杉への感謝からだと思いました。

大杉の倒壊という悲しい現実と向き合い、必死に大杉を守ろうとする人々の姿から、私は大切なことを見つけました。「故郷を愛するとは、こういうことなのだ」「普段は当たり前すぎて気付かなかったけれど、故郷の素晴らしさは、一つのこと心に心を通わせる人たちの中にある」ということです。

大杉の雄姿を、もう見ることはできません。しかし、私は大湫町に住む一人として、また、決して多くはない、大湫町の次世代の担い手として、故郷の人々の大杉への思いを大切に受け継ぎ、これからも大杉再生のために、自分のできることを実行していきたいと思います。そして、もっともっと大湫町を好きになりたいと思います。

私の故郷大湫町は、「大杉が育ててくれた町」「住民が大杉を守った町」です。そんな大湫町とそこに住む人たちが、私の誇りです。

